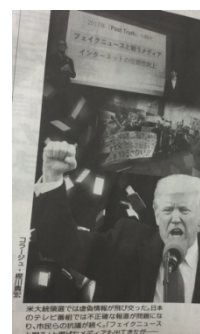


偽情報と「ニュース女子」問題

写真は毎日新聞 1 月 30 日夕刊「ポスト・トゥルース」の危うさがテーマの特集ワイド。リードから一英国が欧州連合 (EU) 離脱を決めた国民投票や、トランプ氏が当選した米国大統領選などで「うそ」が政治を動かしたと指摘される。その現象を表したのが、事実かどうかは二の次となる「ポスト・トゥルース (Post Truth)」。日本は無縁なのか。



偽情報が世界を駆け巡る中、日本では既存メディアによる不正確な報道が問題になっている。「デマの訂正を」と有志の市民らが抗議しているのが、2 日に放送された東京メトロポリタンテレビジョン (TOKYO MX) の番組「ニュース女子」だ。問題の放送では、沖縄県東村高江地区の米軍北部訓練場のヘリコプター離着陸帯 (ヘリパッド) 建設問題を取り上げた。軍事ジャーナリストが、抗議する住民を「テロリスト」に例えたり、座り込みを続ける住民に高齢者が多いことを指して「逮捕されても生活に影響もない」と皮肉ったりした。さらに「反対派の暴力行為により、住民でさえ建設現場に近寄れない」ことを理由に現場で取材していないことも分かっている。

昨年 10 月、高江で抗議活動取材した私 (記者) の経験では、MX が報じたような状況はまったくなかった。「地元メディア以外の取材活動が危険だ」という放送内容を確認するため、その後の状況について沖縄県警に取材したが、広報担当者は「記者が襲われたことなど聞いたことがない。MX は勝手に恐怖を感じているんじゃないか」と話した。番組ではまた、「抗議活動で救急車が現場に入れない事態があった」とも伝えたが、地元の消防署は「そういう報告は一切ない。そんな話を流されて迷惑だ」と否定する。番組への抗議に対して MX は、16 日の番組後に「沖縄基地問題を巡る議論の一環として放送」「さまざまな立場の方のご意見を公平・公正にとりあげてまいります」などのコメントを放送した。これに対し、市民は「うそは『意見』ではない」などと、より反発を強めている。このケースでは、ネット媒体が既存メディアの検証を始めた。インターネットメディアの「バズフィードジャパン」は、問題の放送の 5 日後に撮影場所が高江から約 40 キロも離れていることなどを指摘する検証記事を掲載。

正確な情報に基づいた議論が成り立つことが民主主義の基本だ。ポスト・トゥルースを放置してしまえば、社会の基盤がむしばまれてしまう。

@ 番組「ニュース女子」の司会を務めているのは、東京新聞 (中日新聞東京本社) の長谷川幸洋論説副主幹。読者から厳しい批判があり、2 日朝刊に「重く受け止め反省 沖縄報道の姿勢変わらず」という謝罪 (次ページ) が掲載された。こちらも注視したい。

(2017 年 2 月 3 日)

「ニュース女子」問題で本紙に批判

地上波の東京ローカル局・東京MXテレビが一月二日に放送した番組「ニュース女子」の中で、沖縄県の米軍施設建設に反対する人々を中傷する内容がありました。東京新聞(中日新聞東京本社)の長谷川幸洋論説副主幹が番組の司会を務めており、読者から厳しい批判や本紙の見解を求める声が多くなりました。東京新聞の深田実論説主幹が返答します。

重く受け止め反省

沖縄報道の姿勢変わらさず

本紙の長谷川幸洋論説副主幹が司会の東京MXテレビ「ニュース女子」一月二日放送分で、その内容が本紙のこれまでの報道姿勢および社説の主張と異なることはまず明言しておかなく、その内容は本紙とはなりません。

ニュース女子問題とは

「ニュース女子」では冒頭約二十分間、沖縄県東村(ひがしそん)高江の米軍ヘリコプター離着陸場建設への反対運動を取り上げた。

「現地報告」とするVTRを流し、反対派を「テロリストみたい」「雇われている」などと表現。反ヘイトスピーチ団体「のりこえねっと」と辛遊王(シン・スゴ)共同代表を名指しし「反対派は日当をもらっている」「反対運動を扇動する黒幕の正体は？」などのテロップを流した。辛さんは取材を受けておらず、報告した軍事

ジャーナリストは高江の建設現場に行っていない。MXは「議論の一端として放送した」とし、番組を制作したDHCシアターは「言論活動を一方的に『デマ』『ヘイト』と断定することは言論弾圧」としている。辛さんは名誉を侵害されたとして一月二十七日、放送倫理・番組向上機構(BPO)放送人権委員会に申し立てた。のりこえねっとは沖縄の現場から発信してもらった市民特派員を募集、カンパで出した資金を元手に、本土から沖縄までの交通費として五万円を支給。昨年九月から十二月までに十六人を派遣した。

残念なのは、そのことが偏見を助長して沖縄の人々の心情、立場をより深く傷つけ、また基地問題が密め

ではあっても責任と反省を深く感じています。より受け副主幹が出演していたことについては重く受け止め、対処します。多くの叱咤の手紙を受け取りました。

「一月三日の論説特集で主幹は『権力に厳しく人に優しく』と書いていたのにそれはどうしたか」という意見がありました。それはもちろん変わっていません。

読者の方々には心配をおかけし、おわびします。本紙の沖縄問題に対する姿勢に変わりはありません。